中・日近代化における先見の効用

―『特命全権大使米欧回覧実記』と『郭嵩燾倫敦与巴黎日記』―

厳　安生

要旨

本論文はほぼ同じ頃にできた表題二テキストに対する精読と比較を通して日中両国が開けた世界に面した当初に取った姿勢、見せた差異ならびにしばしの連動風景を考察するものである。分析例に両者の「博覧会」と「営業力」に関する記述および効果を取り上げる。英国などで万国博覧会という産業文明の新制度に開眼し「進歩」史観を刺激された岩倉一行は帰国後すぐ同制度の導入に着手、そして一世紀後の大阪万博につながっていくのだが、それと上海万博（二〇一〇）との四十年の隔たりは十九世紀後半以降の両国の近代化に見られる時間差にほぼ対応している。その間の、始めは同じ出発の時点に立ち同じ東洋的「先知先覚」の自負に燃えて且つお互い遜色のない見聞や見識を示していながら、郭のそれが国の開化と進歩に何ら役立つことができなかったのは何故か。一方の「営業力」に関しても岩倉使節団がそれを考察の軸にして得た諸々の啓発が後の「殖産興業」に大きな役割を果した傍に、郭による同様の考察と先見性に富む一連の建言は本国の「営業力」開発につながるどころか、建言者本人の自滅ひいて全発言の一世紀余の埋没を招くほかに効果はなかった。この事例、後世に尽きない思考を残すと同時に東アジア比較文化史を研究する上でも恰好なスタディ・ケースになろう。

キーワード：先知・先覚、進歩、博物館、博覧会、営業力

先知ノモノ之ヲ後知ニ伝ヘ、先覚ノモノ後覚ヲ覚シテ、漸ヲ以テ進ム、之ヲ名ツケテ進歩ト云フ、進歩トハ、旧ヲ舎テ、新キヲ図ルノ謂ニ非ルナリ、（中略）其進歩ノ序ヲミレハ、今ヨリ後ノ勤勉セサルヘカラサルヲ感ス、感動心ニ動キ、学習ノ念沛然トシテ制スヘカラス、（1・114）[1]

洋務はもとより談ぜぬわけにはいかぬ。それを談論するのは人をして稍その切要なるを知らしめ国を安泰に保たん為である。苟も其昏にして頑なるを坐視すれば兵を用いられずんば則ち削がれ、一旦兵を用いられて必ず折って印度と為る。これ如何ほどの大事で言わずと置けるものか……先知をもって後知を覚らしめ、先覚をもって後覚を覚らしめて、余はこれにおいて亦敢て辞ざざる所があり、區區たる世俗の毀誉において何ぞかかずらうこと有らんや。（2・998）[2]

右は本小論の主旨にかかわる二つの言説である。前者は『特命全権大使米欧回覧実記』（以下『実記』と略す）中の一節である。ご存知のように岩倉使節団と同『実記』に関してはすでに多数の先行研究があり、国際学界にもある程度影響が広がっている。この方面の専攻でなく専門的論議に参加することができない筆者は、本稿においてただ、岩倉一行とほぼ同じ頃に一人の中国人高官もロンドンに行って常駐し、そのイギリスに関する記述に限って見れば『実記』の該当部分に較べて決してひけを取らない一冊厖大な記録を残していることを、紹介を兼ねて取り上げてみたい。『郭嵩燾倫敦与巴黎日記』（以下『日記』と略す）というもので、日記主の郭が中国近代最初の外国常駐「大臣」として一八七七年一月から七九年一月までイギリスに駐在（後半駐フランス公使も兼務）していた期間中の日記である。『日記』の現刊行本は、彼が使命を帯びて上海から赴任の途に上った一八七六年十二月から任を解かれて本国帰着する一八七九年三月までのものと、「出国以前」と「帰国以後」の二節録を加えて約五十七万字の大冊になっている。『実記』の第二編「英吉利国ノ部」の二十五万字弱に較べ、中文古文と漢字仮名まじり文との密度差をも斟案すれば、約三倍の分量になる。ただし、いまの書題や編み方はいずれも後の編集者によるものであり、ここで注目したいのは、この日記が郭の郷里、湖南省の某出版社の手によって付梓され日の目を見るに至ったのは、実は百余年後の一九八四年だった、という事実である。つまり再度『実記』に比して言えば、一方はちょっとした研究ブームとなるほどにずっとスポットを

浴びつづけ、一方は湮没すること一世紀、という対照が成り立つ。そのこと自体に第一に甚しい歴史の落差ないし不条理を感じさせずにおかない。また現実に目を移しても、昨今の実利社会ゆえ、ごく一部の専門研究者や（郷里の先賢顕彰の意図もあろう）良識出版家を除いて、この本がどれほど一般に読まれ知られているかも疑問である。このように鮮烈な対照は、しかし裏返して見れば、まさに中日間ひいて東アジアの比較文化史研究上の格好なスタディ・ケースの一つになり得るのではないか。そこでまず、冒頭の二つの引用文中の「先知・先覚」云々に見られる表の同一性から出発して、両テキストに含まれる相異なる問題性を多少探ってみたいと思う。

郭嵩燾と彼のロンドン日記

郭嵩燾（カクスウトウ）（一八一八――一八八二）という人物と、彼がイギリスに使するに至った経緯はこうである。十九世紀六十年代中頃の中国に、いわゆる「太平天国」の乱の収拾と同時に、体制側による「洋務運動」というものが発動された。運動を主導したのは朝廷の少数開明派の満州王族と、太平天国鎮圧で勢力をなした曾国藩、李鴻章ら地方実力派で、後者は実質上の主役であり実動部隊であった。それは、運動目標たる二つのキーワード「武備」「方言」にも示されるように、極めて限定的かつ低次元の改良的な取組みで、それまで相継いだ内外の打撃で大揺れに揺れた清朝支配体制の取繕いと延命をはかるためのものであった。それでも、前者の「武備」、つまり近代式の造兵造船所の開設、西洋軍艦の購入、同士官養成の留学派遣などに関しては、わりと容易に実施に移された。二十数年前のアヘン戦争、ついで英仏連合軍の北京侵攻を経て、西洋の「堅船利砲」の凄味と、さらにはつい直前の太平天国撃滅戦で在上海の欧米人傭兵「洋銃隊」から決定的な助太刀を頂いたことに洋兵洋銃の有難味をつくづく思い知らされていたからである。その上、そういった形而下に属する器具類は、握っていれば体制側にとって百利あって一害なしと認識するようになった上層部は、比較的順調に意識転換と意思統一が実現できたのである。それに対し「方言」（欧米主要国の言語を学び、交渉人材を養成する）の方は、スタート時から中央の官僚集団から士人社会までの「総スカン」を喰っていた。歴史以来の中国の対外姿勢は一貫して中華中心で外事にあまり意を措かない。たとえかかわりを持つにしても、周辺国の自分に対する「朝貢関係」しか許さなかった。周辺以遠の「夷狄」に至ってはなおさらのことで、「夷語」「夷務」などの用語からも窺えるよ

うに、そうした地域に独自の言語文化や文明の存在すること、「夷」をあしらう以上の対等交渉の相手たることを認めようとしなかった。それが今となって、中華中心だった「天下」の構造が欧州中心の世界秩序に取って代わられ、しかも現実にその秩序体制に刻一刻と押し込められつつある。そんな下での「方言」挙行、とりわけ常駐代表の派出は、とりもなおさず他人の弱肉強食の俎上に、わざわざ自ら載っていくことを意味するのでなくてなんだろう。故に、脳中いまだに千年の迷夢醒めやらない旧弊官僚と士大夫層のそれに対する拒絶反応は想像に絶するものがあり、そんな矢面に立たされたのが問題の郭嵩燾なのであった。一八七五年の春、中国の西南辺境に武装侵入した某イギリス外交官が殺害される事件が起こった。それを好機として在北京のイギリス公使は、それまで数十年の攻防を経てようやく外国使節の北京駐在を認めながら、それでも派出だけは拒みつづけた清朝当局に対して、強い外交攻勢を発動した。本国では今回の事件を重く受け止めて、現場でのモタモタは徒らに事態を深刻化させるのみだから、できるだけ速く特命全権を送って、謝罪を兼ねて事態の収拾と今後の関係安定につとめるべし、ということになった。そこで清当局はついに耐え切れず、初の常駐使節派遣に踏み切らされたのだが、北京の現職高官中にそんな火中の栗を拾い、しかも頭を下げに行く者などだれもいなかった。そんな中での、郭嵩燾の再登板であった。彼はもともと前述の太平天国鎮圧の主力だった「湘軍」（湖南に募った地方軍）系統の最古参の一人で、しかも同総帥曾国藩の盟友であった。旧書院で同学の時代に曾と金蘭の契りを結び、湘軍が興ってから方々の軍務、行政、のち洋務の要職を任ぜられ、相当な地位にも上った。だが反面、彼は出身グループの中でも人一倍うがった見識眼と一匹狼の気質をもっていたために、体制の中では終始煙たがられる存在であり、主に参与職をつとめながらも、たえず任官と免官を繰返されていた。盟友の曾でさえ彼のことを「芬芳悱惻、然著述之才、非繁劇之才也」といって彼の首長任用の不可を主張していた。「芬芳悱惻」四字は彼らの故国・楚の地に生まれ楚の川に死した憂国詩人屈原の詩賦を形容する古典的評語で、世に稀な香り高い文彩、気韻と幽愁やるかたなき性質をいう。ここでは郭もそれに類する気質なので、著述に向いても俗務繁雑で責任重大な首長職には向かない、という意味である。したがって、同期の曾はもとより彼が当初推挙にも与った後輩にあたる左宗棠、李鴻章らがみな清の「中興名臣」に列せられた中で、彼はせいぜい洋務派の第二集団にしかとどまらず、しかも目下失職中である。そんなところへの突然の再起用なのであった。その間に種々笑えない経緯や風波もあったが、憂国の念あつい郭の方では、上の思惑や計略、士人社会の嘲笑と罵声、友人の苦言諫止等々をいっさい顧みず、こんな時にこそ国家のために艱難を任ずるのだ、という気概で勇んで拝命し、

渦中に投じていく。そのおかげで、中国近代を振り返る上で貴重な一冊の生の記録を私たちに残してくれることになったわけである。

「進歩」への信念と「及ぶ能わず」の嘆息

さて冒頭に引いた『実記』の文言は岩倉一行が「ブリッチ、ミジエアム」即ち大英博物館を参観した時の様子を叙した後につけた、記述者久米邦武の史筆にして言えば「太史公曰く」スタイルの評言の一節である。総じて「其順序ヲ瞭示スルハ博物館ヨリヨキハナシ」を論ずるのが評言の主旨だが、結ぶにあたって次のような中国、日本を含む東洋人の「習性」に対する質疑を提出している――「曾テ評ス、欧州ノ民ハ一タヒ家ヲ建レハ、世ヲ嗣キテ之ヲ修繕シ、益其美ヲナス、清国ノ人ハ、之ヲ建ルニ甚タ心ヲ用フ、成ルノ後ハ亦掃修セス、廃圮スレトモ亦毀タス、我日本ハ両異ナリ、之ヲ建ルニ鋭ニシテ、其工ヲ省キ、已ニ成レハ、又毀ツテ改立ス、是ヲ以テ進歩改良ノコト少シ、是豈ニ其性ノ然ル所カ、抑モ教育ノ未タ至ラサル所歟、人ノ言行、其美ヲ採録シ伝フルコトナク、古今ノ進歩、之ヲ史記シテ聞カシムルコトナク、博物館以テ其目視ノ感ヲ発スルナク、博覧ノ場、其新知ヲ誘クナク、諉シテ習性ノ異ナリト謂フハ、篤論ニ非ルナリ」(1・115)と。

進歩を前にして、まず自らの「進歩改良ノコト少シ」を認め、その上で「学習ノ念」と「勤勉セサルヘカラサル」の覚悟で「新知ヲ誘ク」等の取組みで臨むか、それともいわゆる「習性」に委ねるか。岩倉使節団は前者を取るのに一点のためらいもなかった。この基本姿勢、そして、それがそのまま後の明治新政につながったことは何よりも重要な、東洋近代史上の教訓だったといえる。それは同時に、次に見る郭嵩燾の場合と根本的に違う分岐点でもあった。

人の美点を伝え進歩の道を広く聞かしむる点において、しかも同じく東洋文人的「先知先覚」の自負と自覚を持っている以上、郭の(彼がいう)「布利来斯妙西阿姆」に関する記述も『実記』と同工の趣きがあった。彼にしても東洋の文人の常として(久米の表現を借りれば)「『ウオールト』ト名ケル、円穹ノ書棚」の「結構ノ壮美」と、ことに「日本支那ノ書籍」の収蔵豊富なのに一唱三嘆した。あと「鉱石ノ室」に陳列された「天ヨリ隕タル石ニアル」(郭文「二石自天墜下」)はじめ百般の鉱石、化石、「前世界ノ動物骨」、「博古ノ室」に列せられる英国はじめ「各国古来ノ石器、玉器、銅器、磁器」と「スカンテネビエン」ノ古物、「ニネヘ」ノ古物、「エジヤマイナ」ノ古物等々(1・113)

に対しても、両記述とも瞩目せざるはなかった。その中でも郭の場合は、なお古代ローマの石碑、石像、石棺や、とりわけ彼が「埃及石柱文」に似ていると言ったある石碑に多大な関心を見せていたことは注目を引く。彼は赴任の船がスエズを通った時に一行の買ったクレオパトラ女王おぼしき浮彫の拓本と、同行のイギリス人が聞かせてくれたこの女王の物語りを通して、ここ西の方にもこんな古い争いや行き来の文明史と、むしろ本邦（建前上マイナスだが）国宝の楊貴妃より遥かに先輩で、はるかに蠱惑的な絶世の美女も権勢絶頂の女帝まで存在していたのかと知って、古エジプト文明に対して多大な興味をそそられるようになった（2・74）。そして、ロンドン到着後彼はさらに「エジプト学」という名前や、その起源について、「一千八百一年、埃及が英人の拿破侖の乱を平定したのを以て石碑を酬う」ことや「埃及の古文極めて中国の篆籀に類し、西洋数千年これを識る者は無し……近数十年羅爾塞得斯多姆に古碑を掘ったのが有り、仏国の人山波里安が希臘文で以てこれを推測し、よって埃及古文たるを弁知した」（2・451―453）という経緯まで知るようになった。彼が博物館で瞩目をしたのがすなわちそのロセッタストーンだった可能性は極めて高い。そうだとすれば、もし時系列に沿って辿ってみるなら、郭は近代の東アジアを通じて、いわゆる「エジプト学」の存在だけでなく、その成立の端緒と創始者（フランス人シャンポリオン）のことまで知悉するのみならず、さらに言えば、今日流行の学術語で議論や批判の絶えないオリエンタリズム、という欧州中心の知的体系が端を発した地点に（無意識ながらに、というべきか）突きあたった最初の人だったかも知れない。もう一点、目をオリエントからヨーロッパの現場に戻して見て、先のギリシア、ローマなどの旧物に注目するのと同じように、郭はある美術博物館を参観した時に、レンブラント、ラファエロらの「声名絶世」の名画ばかりでなく、「たとえ一の術芸の微たる」もの（中国の文章経国など正統的価値から見れば）でも国を挙げて重んずる西洋の伝統に対しても、惜しみなく賛嘆を表した（2・151）。いずれも当時の中国の士大夫階級に希有な、東西の文明を横断して眺め深奥まで覗こうとする視野、ならびに気魄だったと言っていい。ところが、である。そういった関心、志向のスケールの大きさにも拘らず、全体的に見て郭『日記』は、とりわけ後半になるほどたんなる報告記事のままに終わっている場合が多く、それは『実記』との著しい差異でもあった。後者では、大英博物館に美術を学ぶ者などが道具を「齎シ来リテ……其状ヲ摸スモノ絶ヘス」（1・114）という風景ひとつに触発されただけでもさっきの、記事部分に等しい長文の評言を書いてしまう。それにひきかえ、郭の場合は陳列の様子を述べ終って「魄力の大なること、及ぶ能わずや」（2・140）の嘆声一つを発し、同様の「習う者相就いてその品々を模本と為して各々長ずる所を尽す」という風

景に対しても、「人才の盛なること」（2・151）を嘆くもう一声を漏らすにとどまった。ついでに言って、この「人才」無きことへの嘆きはじつは郭の日記全巻を通じて無数に反復された、きわめて深刻で豊富な歴史的また現実的内容を含んだものだが、ここでは詳述に及ばない。ただ『実記』との比較において見るならば、明治維新の成立で体制が改まり、国を背負って新政の視察・実施の全権を任される一代人才の出現した日本と、未だにそれどころではない当時の中国との歴史の時差と事情差、の一言に尽きよう。そんな下で、ひとり先知先覚の志と自負があったにしたところで、覚らせるべき上下の「人材」がみつからず、さらに後述するように例の「新知ヲ誘ク」行動さえ封じ込められなければならない情況のもとでは、郭においてそれ以上言うことのなかったのも解る。

そのような両国の事情差は、いまの大英博物館とほぼ同列の場においても見て取ることができる。岩倉一行と郭嵩燾とが相前後して出向先で出会った万国博覧会の一件におけるそれぞれの見聞や体験がそれである。

「万博」受容で付けられた差

もし、大英博物館での感触が岩倉使節団一行に「進歩史観」を植えつけたとすれば、つづけて博覧会という事物に接して受けた啓発と刺激が、この度の米欧視察の主なる収穫ともいえる「殖産興業」の理念をストレートに「進歩」の実践につなげる発条にもなった、と言ってよかろう。当時、欧米の本場においても興ってまだ日の浅い万国博覧会というイベントは、東洋の国にとってなおさら新鮮で驚異的な西洋文明の新制度として映っていた。それをまっ先に認識し、その上、積極的かつダイナミックな対応を見せたのは日本にほかならない。その歴史について日本の学界では、すでに多くの専門的論考が行なわれているようだが、その前の（一八六七年パリ万博への）幕府と薩摩ら雄藩による変則的参加はおくとして、明治政府の主宰下で本格的に参加したのは、すなわち使節団が欧州巡回中の一八七三年のウイーン万博であり、一行はその現場に臨むこともできた。回覧実記の該当部分（第五編第八十二巻「維納万国博覧会見聞ノ記」、第八十三巻同「下」）は同会参加者が後年にまとめた記録（田中芳男・平山成信共編『澳国博覧会参同紀要』明治三十年）[3]よりはるかに早い、最も権威的かつ詳細な現場報告だったと思われる。使節団と郭嵩燾を比較する本論文の論旨上、その記述に多少触れもするが、まずは両者が別々に万博の本

大会に臨む前のロンドン見聞イコール万博開眼の記にしぼって見ていくことにする。

さて先に『実記』を見てみると、使節団は万国博覧会の発端である「公元一千八百五十一年ニ、倫敦ノ『バイトパーク』ニ於テ、万国博覧会ヲ設ケシトキニ」造った「原名ヲ『キリスタル、パレイス』と云」う「水晶宮」の会場（1・108）と、「一千八百五十六年ヨリ剏立セル常博覧会」なる「サウス・ケンシントン」博物館を参観した。とりわけ、初回万博の挙行から五年経たずにまた「ケンシントン」の会場を新設したという事実に、『実記』の主たちが万博という新制度の起源とともにそれの根本的なメカニズムを鋭敏に察知し、その上、近代ヨーロッパの文明発達の過程および教訓にまで遡るような考察をなすに至ったことは驚くべきである。『実記』はいう、「当今欧羅巴各国、ミナ文明ヲ輝カシ、富強ヲ極メ、貿易盛ニ、工芸秀テ、人民快美ノ生理ニ、悦楽ヲ極ム、其情況ヲ目撃スレハ」人々はその訳を考えるが、実は「欧州今日ノ富庶ヲミルハ、一千八百年以後ノコトニテ、著シク此景象ヲ生セシハ、僅ニ四十年ニスキサルナリ」。それも、当初大陸の国々がナポレオンに翻弄されて独り戦禍を免れた「英国人民カ工業ヲ振起スルノ志向ヲ積ミ、竟ニ皇帝ノ贅『アルベルト』候ノ尽力ニヨリ」、万国博覧会開催の端が開かれたのである。しかし、開けてみたら欧州各国の「此場ニ持出セシ工産ノ諸品ハ、独リ仏国ノ声価、他ヲ圧倒スル光燄ヲ有シ、英国ノ物品ハ、只器械力ニテ製出セル、麤大ノ物品ノミ多く、其風韻意致ノ優美ナルニ於テハ、反テ小国ト見侮リタル」。それは主催国の面子に係るのは勿論だが、「英人是ヲ観テ、初メテ自国工業ノ拙ナル所以ヲ悟リ」、すかさず種々の努力、工夫をして「再度五十五年仏国ノ博覧会ニ於テハ、大ニ観ヲ改メ」て自国固有の風致を磨き出した。同時にフランスからの工産輸入を減らす結果にもつながった、という。それは「全く博覧会ノ功」としてパリ万博翌年の「ケンシントン」の常設へと進み、それがさらにフランス他ヨーロッパ諸国の「英国ノ進歩ニヨリ、益奮発ヲ生」ずる循環を生むなどして、結局「当時全欧地ニ工芸煥然ノ美ヲミル時運トナリタルハ、僅僅十余年間ノ事ニスキサルナリ」、というのであった（1・64―67）。というふうに、一つの「ケンシントン」設置の経緯からこれほど生々と明快な同時代文明史の認識を獲得できた岩倉一行と記述者久米の見識眼にも感服するが、あるいは、彼らがその場で目睫の間に接した「僅僅十余年」の極めて迅速でリズミカル、また身近なプロセスこそが、新興日本のサンプルを求めに来た使節団とぴったり波長が合わさったからだ、と言った方が正確かも知れない。したがって『実記』のこの一節の記事が次のように結ばれたのも、いたって自然にして歯切れよくきこえる、「此等ノ記事ヲ見テ、之ヲ我日本ニ顧慮スヘシ、四民ノ外国ニ交通セルヨリ、爾来ノ進路ニ於テ、大ニ感触ヲ与フヘキモノ

アラン」(1・69)。いや、その言の明快なことだけではない。使節団の出発前(「已ニ我一行ノ未タ発程セサル以前ヨリ」[4])の明治政府のウィーン万博に対する積極的な対応と、とりわけ使節団帰国後に副使大久保利通の取った内国博覧会立ち上げの大決断を考え合わせれば、この東洋の二大国が開けた世界に面した瞬間の、一方のダイナミックで進取につとめる姿勢と、つぎに見るような、他方の退嬰的で不毛な状態との対照に今さらながら慨嘆を禁じ得ないものがある。

ところで、数年後ロンドンに常駐した郭嵩燾も、当然のことながら「ケンシントン」も「水晶宮」も見ていた。それだけでなく、彼は任期後半に駐フランス公使をも兼務させられたので、一八七八年の(第三回)パリ万博に準備の段階から色々と関与まで持たされていた。早期からフランス側の公文書を受取ったり、清政府の態度を打診され糊塗したり、民間参会に関する交渉事務を荷わされたり、そして開会の前には在英の公使館ごと繰り出して盛会に臨んだり、というふうだった。しかし、こういう千載一遇の好機にも拘らず、しかも渡欧以来旺盛な好奇心と何事も巨細なく筆にとどめる執心ぶりをみせていた彼だったのに、そういうものがすべてどこかへ消えてしまったかのようである。パリの賑わいぶりや開会の盛況など記しはしたものの、生気はない。本会場の展示内容等に至っては、殆ど一字も著けないくらいだった。それは、たとえば『実記』のウィーン大会の記述が二巻二万字以上もする詳細なものだったのに較べれば、一段と際立っている。それはいったいなぜだったのだろう、と考えてみると、彼の身に帯びている故国の事情とそれ故の無力感、ならびに本人のやむを得ぬ認識の限界などが根本にあるほか、この時点ですでに見えてきた解任への動きに臨んでの心境も大きくかかわったに違いない。だが、それらはおくとして、『日記』について見るかぎり、やはりこの一件に関しても悩みや失望の絶えなかったことが、彼をして一種の「心頭滅却」の状態に陥らしめたことと思われる。筆者は、かつて万博という西洋起源の制度に対する東洋の認識および導入の歴史について調べたことがある。それを通じて、この方面における日本の先見や先進性が確認できることと、一九七〇年の大阪万博と、(ようやくそのことを意識の上にのぼらせ相応の余裕もできて挙行をかち取れた)二〇一〇年の上海万博との間の四十年の差は、十九世紀後半以降の中日両国の近代化に見られる時間差とほぼ対応している、ということを発見して多少穏やかならぬような気もした。そして、今回の考察を経てさらに、この万博対応の差は、ほかでもなく岩倉使節団の米欧回覧の頃と、郭嵩燾のヨーロッパ初駐在の頃に始まった、いわばお互いの対応「前史」にすでに露呈していたのだと気が付く。もっとも、単に出品参加や人員関与の面からいえば、所見した記載では中国側が決して日本に遅れを

取ってはいなかった。たとえばウィーン万博の場合、当時のオーストリア政府が中日を含む東洋の国々に対しても積極的な働きかけを行なった。おかげで中国も参加したし、以来アメリカ独立百年万博（一八七六、フィラデルフィア）、第三回のパリ万博と参加は続いた。『実記』のウィーン記事にも「支那ノ物品ハ、其優美ナルモノニアラス、七宝塗ノ蒔絵甚タ多シ、欧州ノ人、ミナ争フテ之ヲ摸フレトモ及ハスト云」[5]という類の記載がみかけられる。だが、問題もここにあったのである。伝統的な特長工芸品があって人気も集るが、言うならば、ごく限定的である上、シノアズリーというヨーロッパの古い眼鏡にかなう以外のものではなかった。そのかわり、全体「優美ナルモノニアラス」は、公とか組織的関与の不在を反映している。げんに今回のパリ万博の場合も企画から参会勧誘から出品集めまで、一切の事務には「終始ハート（イギリス人、上海税関長――筆者訳注。以下同じ）一人が当り、国家はかつて心ひとつ究めない」（2・415）、と郭は言っている。それで結果的に、外国人の税関長ハートらの働きかけによって民間からかなりの金も集まったようで立派な館舎まで建ったが、「商人で会に赴く者六人」あるのみだったという。ロンドンの郭全権にしても、事前に国内の当局や、しかるべき筋から何か兼務または統轄の指示や権限委託を言い渡された形跡は『日記』に見あたらない。だから郭は一年前、パリ万博の総裁から親書を受取っても、何ひとつ具体的反応や対応を示せずに、ただ当企画の「概ね中国の力の及ぶ所に非らず」（2・302）の一語を記すにとどめた。後になってから、在中国イギリス人筋からいろいろ話を聞かされたり、館舎設計図を見せられたりした時も、ただ淡々とした表情で聞き手を決め込むしかなかった。しかし彼は本来、知らぬ存ぜぬを決め込むような心境では決してなかった。ここで、郭日記に目立つもう一つの特徴について紹介を挟む必要がある。それは、郭が当時ロンドン駐在中の「日使上野景範」らを媒介として示した新興日本に対する高度な注意と関心と、そのための密度の高い交流であった。そのような相互交流と東洋文人風の切磋琢磨を記した記録は、『日記』中に約二十ヶ所もみつかる。それらの中で郭は――これも当時点の中国士人においてはごく希な態度だが――大人（たいじん）の懐で自分たちより一歩進んだ東洋の先知先覚者からつとめて謙虚に学ぼう、道を問おう、という姿勢を示していた。ある時、普段のように日本公使館を訪れていったら、「彼の戸部（中国名、戸口、財政を司る）長官の倫敦に来て歳出入経理の宜しきを考求し以て国用を定むるを知る、名は恩戈葉欧姆（カオル・イノウエ）、即それに就いて談ずるに甚だ快い……言う所の国を経つる宜しきは聞くべきもの多し」（2・145）。そして十日後答礼に来た井上を再度つかまえて、明治政府の歳出歳入から税制の詳細、さらにその手本にしていたという西洋の税制一般まで教えを求めた。同業者の上野との行き来はもっと頻繁で、当面の英、仏の

内政外交の動向からそれへの対応や外交ルール等にいたるまで情報交換や意見聴取を行なっていた。ある時、万博のことに話題が及んだ。パリ万博対応の思案に暮れていた郭は、たまたま来訪中の上野に向かって、「各国が奇を炫う会（郭の訳名か）を開き、日本が赴くのにかかる公金はいくら」「各国この会を間隔を置かずに開くのでは、かかりがまた多くなかろうか」等々と確かめることになったのである。そうしたら、ウィーン万博以来の明治政府による奨励、援助、貸与そして収支均衡確保の施策と効果について答案を得、また関連の「章程は如何」と尋ねるのは良いとして、その上で「来年仏国（フランス）の奇を炫う会に総裁に任ぜられるのは大太子で、すでに三たび仏国に赴いて館舎の設営に臨まれることになった」と聞いた時の驚きは尋常ではなかった。東隣も西洋のように「君民商務を本として相崇め尚ぶこと斯くの如き」（2・349）だと知るに及んで、もう筆を擱くよりほかなかった彼である。前に見た「国家、心ひとつ究めない」「商人、会に赴く者六人のみ」等々と対照して、それはまたなんと差の「斯くの如き」だったことだろう。郭のパリ万博開会に及んだ時の元気なさが肯われる。

しかし、話はまだ終らない。いまのパリ万博の話が表だとすれば、また裏がある。郭はパリ万博に関与させられる前に、すでに水晶宮などへ案内してくれた旧知のイギリス人から「英国の富強は一に学問より出づる」ことと、「中国にも宜しく仏、米諸国に倣って大々的に奇を競べる（もう一つの訳語）会を開き、以て見聞を広げる」（2・214）ことを説かれて、彼らが目下上海で企画・推進中の「上海博物院」設置構想への賛同と上層部説得工作を働き掛けられていたのである。郭にしても『実記』に述べたようなロンドン万博以来の変遷とパリ、ウィーンの成功例も含め、「国家が利を獲て甚だ厚き」ことと、今回の上海博物院の収支試算つきの案を通して「中国の学問に益あるのみならず国用にも必ず利する所ある」（2・220）ことを十分承知しているので、熱心な反応を示していた。ところで、上海サイドのこの提案は元来、洋務を統轄する李鴻章のもとに届けられたものだった。だが要領の良い李はウンともスンとも言わずに、ただ検討を続けよといってそれを提案者側に戻したために、堂々めぐりがロンドンの郭のところにまわってきたわけである。そうしてクルクル、モタモタと埒の明かない話の席に日本公使の上野も居合わせたのだから、いまの万博対応に関する対話につづいてこんな問答も交わされることになった。郭問う、「日本は一切にみな西法を用いて、また博物院の設けはあるか」。上野答える、「東京にて近三年に一つの院を作って宏壮美麗を極め、名づけて博覧会と為す。日本三島は三府三十五県に分ち、各々その物産を悉して院の中に分置し……ここにおいて市に赴き貿易するものはみな院内に集まる。（中略）内務省に隷属し、所謂る勧業博覧会なるものなり。これ亦、奇を炫う会の一端なる故、内国博覧会と名付く」

（2・349）。それは一八七七年十一月三日に交わされた対話である。ここから「近三年」とはすなわち一八七四年、岩倉使節団が帰国した翌年のことである。前年秋に帰国後、副使の大久保は強力に征韓論を抑え、西郷、板垣らを退陣に追い込んだと同時に、新設の内務省の内務卿に任じられ、内政の全権を一手に握るようになった。米欧回覧のホットな収穫を反映して、大久保内務卿はただちに「奇を炫う会の一端」たる内国勧業博覧会の開催を建議した。この重大な決断はそのまま日本の博覧会制度の確立、連続五回の内国勧業博覧会の挙行、二十世紀初期に（同名ナンバー制から）改名後も絶えざる各種名目の博覧会の興行継続、ならびに全府県を巻き込む取組み体制の確立など、いわば大阪万博の前史、あるいは一世紀に及ぶ日本の博覧会全史を開く発端となった。それはおくとしても、あの第一回の取組みの勢いはめざましいものであった。いまの内務卿建議の翌年にさっそく始まった会場設営や、全府県動員から開会への盛り上がり様もさることながら、ユーラシアの東の涯から西の涯にまで及ぶ伝わり方一つをとってみても、ただただ感心する。というのは、第一回内国博覧会は一八七七年の八月二十一日から十一月三十日まで挙行されたもので、郭・上野対話の時はまだ幕が降りていなかった。それなのに、東京の会場上野の熱気が、このように、ロンドンの上野の身に乗り移り大いに胸を張っての発言に化してしまったのである。この対話現場の風景、雰囲気を想像するだけでも、ある大きな歴史のうねりが身に迫って感じられる。そのかたわらに、身近にそれに接した郭嵩燾の心中またどんなものだったかは、いまさら問うに忍ぶまい。

ところでパリ万博の様子に関してこれといった記録を残さなかった、と前述した郭の日記には、それでも次のような結尾の一文があって、比較文化史の観点から興味を惹かれずにおかない。（中国館の）「館内、飾り付け華麗、かこんで牌楼や亭榭、金ぴかで絢爛を極める。日本のは即ち槿の垣根を以てめぐらし、中に小屋いくつかを設け、隙の地にみな花や草を植えて…並びに古木数株を移植している。いずれも西洋に無い所で、中国に比べて清雅の気ありと為す」（2・570）と。ここの、とりわけ最後の日本庭園の「西洋に無い所」と、中国の金ぴか絢爛より「清雅の気あり」云々は、日記主自身にどの程度意識があったかはともかく、二語にして立派に日本庭園の中、洋とも違う風格、大袈裟に言えば日本庭園芸術の東西・中日比較観に言いあたったものと言えまいか。これが第一点である。次に第二点、歴史の事実としてより重要なのは、その欧洲のイベント場に日本庭園を構えるという設営の意匠こそ、近代日本がウィーン万博をきっかけにヨーロッパ（少なくとも美学の）世界に放ったヒット第一号だったといってよく、そして、それが今回のパリ万博にも目玉商品として引き継がれたことで

ある。それは良いとしても、この「清雅」美学が館内陳列の精選した各種工芸品を中心とする約四万点の日本物品と相俟って、ヨーロッパにおいて所謂ジャポニスムを、点々とあった火種の状態からぱっと燃え盛らせてしまう契機となったのも、今回を含む二回のパリ万博だったのである。それをさらに、郭公使により身近な角度から言い換えれば、とりもなおさず、これから自分たちが向き直していく近代西洋の世界においては折も折、その前まで長く脚光を浴びていた（わが中国人ならこれらにさえ言及すれば、前後の消長や帰趨など問わずとも鼻高々の材料になりそうな）いわゆるシノアズリー等々は正に、しかも自分の東隣で〝弟子〟だった日本によって、そのお株が奪われつつあることをも意味するものにほかならない。この歴史的時点と事態をきっかけとする向後の消長、栄衰の構図は郭の炯眼、そして現場で上野らに示した大人的胸襟を以てしても、とうてい見越されはしなかったに違いない。

戻って『実記』のウィーン万博の記事に目を通してみれば、それは量的に、また記述の詳細さや認識価値において、郭の『日記』と較べるべくもないことは前述したとおりである。今述べたような角度から関連記事を引いてみると、「近年日本ノ評判欧洲ニ高キ」ことに関する記述が目立つ。「我日本国ノ出品ハ、此会ニ殊ニ衆人ヨリ声誉ヲ得タリ」という様子を描く中で、「陶器ノ誉レ高シ」、「漆器ハ、日本ノ特技ナレハ、評価高シ」、絹帛類の「糸質ノ美」、寄木細工も麦藁細工も「亦評判」、他に染物、七宝塗など「劇賞ヲ受ケタリ」。特に、七宝などの「画様ハ西洋ト別種ニテ、花鳥ノ如キハ、風致多シトシテ賛美」を得た（原文では一方に「…賛美スレトモ、人物ノ画ニ至リテハ、或ハ俳優ノ粉飾ヲ模シ、陋醜（ろうしゅう）ノ面目、人ヲシテ背ニ汗セシム」とか、陳列の「油絵ノ如キハ曾テ欧洲ノ児童ニモ及ハス、本色ノ画法、反テ価ヲ有セリ」類の但書も散見して面白い）、等々[6]と列せられている。ここの、西洋のと別種な「画様」「風致」「本色ノ画法」に関する言及にしても、今のジャポニスム、ないし後に続くアール・ヌーボーという一世を風靡した美学様式の成立に突き当たるような大きな問題性を内包している。しかし、今の郭の場合とも同じかと思われるが、これほどまめに観察し記録した使節団の人たちにしたところで、はたして「我日本国」の本色画様などが、そこまで欧州美術に点火し拡がろうとは思いも寄らなかったのではなかろうか。いずれにせよ、歴史の動きや人間の限界とかいう月並みな問題になりかねないようでも、かつての歴史現場のそのような生き生きと生々しい動きかた変わりかた移ろいように思いを致すと、やはり感なきではいられまい。

「営業力」重視と「学理」偏重

営業力、それは『回覧実記』のキーワードの一つである。「英吉利国総説」の冒頭から「其形勢、位置、広狭、及ヒ人口ハ、殆ト我邦ト相比較ス、故ニ此国ノ人ハ、毎ニ日本ヲ東洋ノ英国ト謂フ、然トモ営業力ヲ以テ論スレハ、其懸殊モ亦甚シ」（1・22）と、明確な問題意識を打ち出している。その後の各主要産業から大小さまざまな町や工場までの参観においても、こうした関心が一貫して表われている。それは先の新興国アメリカの視察でも同様だったろうが、何しろ、一歩ロンドンに足を踏み入れると「其気象ノ宏壮ナル、米ノ華盛頓、新約克ハ己ニ陋巷ノ思ヒヲナサシム」（1・59）というのが第一印象なので、なおのこと、この近代工業文明の本家の視察に身が入ったことだろう。主な産業の視察をすれば「英国ノ富ハ、元来鑛利ニ基セリ、国中ニ鉄ト石炭ト産出高ノ莫大ナルコト、世界第一ナリ」、「英国ノ民、尽ク炭鐵ヲ衣食セルナリ」、それと同時に「其製作ノ利ハ、紡織ニアリ」と、鉱業と繊維工業、重と軽の両分野における実力を認めている（1・29―31）。それから、関連のシステム整備に目を移せば「西洋ノ民ハ、道路ヲ脩ムルコトノ生理ニ緊要ナルヲシル」（1・229）こと、英国の場合「土地人口ノ割ニ鉄路ノ多キコト、世界第一ナリ」「水路貿易ノ盛モ、亦世界第一ナリ」（1・24）、そして「郵便ノ法ハ、米欧各洲ニ於テ、凡ソ貿易ヲ盛ニシ、文教ヲ普クスル国ハ、殊ニ緊要ナル務トス」（1・106）等々と洩らさず記録にとどめている。中でとりわけ会心の論としては、次のような記述を挙げるべきだと思う。一行は、イギリスは農業国でなく、農産物の殆どを輸入に頼っていることを知っている。それだからこそ、ある穀物倉庫を参観しそこの設計、構造と設備のすぐれて進んでいるのを目にした時の感心ぶりもひときわ強烈なものだった。「此穀倉ノ景況ヲ見、日本ニテ穀物ヲ取扱フニ較フレハ、益スル所少カラス、日本ノ民ハ、鎖国ノ余習ニ因リ、総テ生理ニ於テ、研究ノ力乏シ、其利益第一タル、穀物ヲ取扱フサヘモ、久シク患害ヲ受テ」として、日本の場合の欝蒸壊敗、鼠害、散漏など患害の多いことを挙げつつ、「是事ノ難キニモアラス、只習慣ニ圧セラレタルナリ」という反省にいたる。それだけではない。現場で獲得した次のいくつかの、将来を見越しての見解は、より注目に価しよう。一つ、「日本人民ハ最モ農事ニ慣レ国利ハ重ニ農穀ニアリ、貿易ノ開ケニ従ヒ早晩必ス穀物ヲ西洋ニ輸送セサルヘカラス、此記事ハ殊ニ注意ヲ要ス」。一つ、この麦倉庫を観ても解るように「小麦ハ欧洲ニテ

第一ノ貴穀ニテ、其価最モ貴シ」、ところが日本は大の農業国でありながら、麦を「雑穀トシテ賤シムニヨリ……麦田ヲ廃シテ草蕪ニ付シ、若クハ化シテ水田トナスニ至ル」。だが反面、物事は塞翁が馬で、いま「営業」の要を悟った以上、いっそのこと頭をも逆回転させて、「今ヨリ米麦輸出ノ途ヲ開キ、思慮ヲ其耕作ニ致セハ、麦ノ価位ハ、反テ米ノ上ニ出ン、如此ナレハ、全国ノ荒蕪地、化シテ麦田トナスヘキ所ハ、ミナ勤メスシテ鋤犂ノ跡ヲミン」のではないか、という（1・126—130）。さらに三つ目、一行が見て廻っているうちにこんなヒントのつかみ方も現れてくる。「当時欧洲ニ『ビール』醸造ノ盛ナル」を見て、彼らはまず「飲料ハ、国民ノ開明富饒ナルニ従ヒ、益精美ヲ好ムモノナリ、故ニ飲料ノ消費高ニテ、国ノ開化ヲ証スルト謂フ説モアル如ク」と認識し、その上で、そもそも「醸造術ハ、日本ノ長技ニ属ス」ものだから、今の麦に対する再認識から出発して、「飲料消費ノ事由」すなわち「農業ヲ製作シ、醸造品トナシテ輸出スルハ、尤国産倍殖ノ眼目ヲ得タルモノト謂フヘシ」、とまで述べている（1・325—327）。目が醒めるほどに鮮やかな三段論法もそうだが、ひょっとすれば、これは今日でも決して古くない（だが、東洋では往々にしてマイナスなニュアンスの付きがちだった）「嗜好」飲料の問題に早期かつ前向き巨視的に着目した専門的発言の第一号ではなかろうか。

もっとも、専ら「営業」とか「生理」とかに集中したため、逆に観て猶及ばずの場合もなくはなかった。一行はその視察目標のために「一同ニ鉱底ニ入ル」ような苦労はもとより、大小の製糸、製絹、金銀器、陶器、製磁や玻璃工場からビスケット、カステラ、ボタン、裁縫針や釘の製作所に至るまで足を運ぶのを辞さなかった。そんなある日、彼らは「専ラ線繻類ヲ織ル所」を観た。それを『実記』は一方では「蜘蛛ノ網ヲ結フカ如ク、其理ヲ辨知シ難シ」と記し、他方では「日本ニテハ猶不急ノ巧ニ属ス」（1・327）と断じているのを見た筆者は、ふと噴き出しそうになった。というのは、たまたまその時に授業で学生たちと一緒に芥川龍之介の「舞踏会」を読んでおり、あの「鹿鳴館」の世界に充満した薔薇の花、フランス香水、ルイ十五世式の装い、西洋の吹奏楽や西洋の食事、食卓（既述の「ビール」も登場か）、および例のレース乱舞などの様子に多少こだわったりもしてみた。それが連想されておかしかったのだが、と同時に、使節団の時の「殖産興業」に燃えた緊張感と、十年後の「文明開化」を演出せざるをえない別様な緊張感との間のニュアンスの差、歴史現場の移ろいに特有な不可思議さや面白さが感じられてならない。これはこじつけた小話のようでいて、実は、こじつけではなくて後の「買入れ」の大問題にもつながっていくのだから、一笑に付せるものではない。

使節団は、以上のように、近代文明の本家の巨大なる営業力に目を開かされるのと同時に、ある種の危機感をも身に迫って感じた。「英国ハ商業国ナリ、国民ノ精神ハ、挙テ之ヲ世界ノ貿易ニ鐘ム、故ニ船舶ヲ五大洋ニ航通シ、各地ノ天産物ヲ買入レテ、自国ニ輸送シ、鉄炭力ヲ借リ、之ヲ工産物トナシテ、再ヒ各国ニ輸出シ売与フ」（1・381）。それを裏返して言えば即ち「是東洋南洋ノ民ハ、天然ノ化力ヲ以テ、西洋ヨリ営業力ヲ買入ルナリ」（1・253）を意味するものだから、深刻だと言わざるを得ない。ここから遡って、『実記』の撰者はさらに、「試ミニミヨ」といく度もたたみかけて、一篇の比較文明論を展開することになった。「試ミニミヨ、三千年前ノ古代ニアリテ、東洋ノ生理、始メテ進ム頃ニハ、水、火、木、金、土、穀ヲ化治シ、正徳、利用、厚生ノ道ヲ盛ニスルヲ、政治家ノ要領トシテ、之ヲ九功トハ名ケタリ、生理僅ニ進ミシ後ハ、営業ノ精神頓ニ息ミ、五行ノ説、性理ノ談ニテ、九功ヲ五里ノ霧中ニ陥レ、余理ヲ推考スルヲ知ラス、今ニ猶迷フテ悟ラサルノミ、西洋、東洋ノ開化ハ、乾坤ヲ別ニセルニ非ス、厚生利用ノ道ハ、豈ニ東西異理ナランヤ」と。しかし、沈痛そうな用語の羅列の割には、自問に自答した筆記者の口ぶりは、またいたって単純明快だった。「之ヲ約メテ言ヘハ、人民ノ游惰ナルナリ」に帰するのみで、しかも、その民云々を受けてもう一回問うてみると、むしろ新しい時代を背負ってたつ彼らに相応しい楽観的な展望が開けてくる。「試ミニ之ヲミヨ、東洋ノ西洋ニ及ハサルハ、才ノ劣ナルニアラス、智ノ鈍キニアラス……東洋ノ民、其手技ニヨリテ製作スル産物ハ、高尚ノ風韻アリ、警抜ノ経験ヲ存シ、西洋ニ珍重セラル、是才優ナルナリ、応対敏機ニ、営思活撥ニシテ、模擬ノ精神強ク、当位即妙ノ智ヲ具ス、是智敏ナルナリ」。その上でさらに西洋の民の「営生ノ百事」にあたる「屹屹トシテ刻苦」の精神、用いた「理、化、重ノ三学」、それから（鉄と石炭など「東洋ニ饒足セサルニ非ス」の）富強を致す「其元品」の三点セットさえ加えれば、正しく東洋西洋の開化の道は「豈ニ東西異理ナランヤ」と、肯定的な結論の方へと導かれていってしまう（1・253―255）――そんな調子よりほか知らない『回覧実記』ではあった。

さて次に、郭嵩燾の方を見てみれば、彼には今のような展望も、声高らな調べも、あろうはずのなかったことはいうまでもない。彼の日記に上述「営業力」レベルにおいての関心や記述がなかったわけではない。『実記』のいうイギリスの富強を致す「元品」なる炭、鉄などに対して彼も甚大な関心を抱き、それらの資源分布、蔵量、採掘や利用法から製鉄製鋼の工程までくわしく記録し、英国中の鉄道、航運、造船、電報、郵便等についてはそれぞれ発展「小史」の形にまで整理するなど考察を怠らなかった。だが全体に、上下と周りから厳しい牽

制と束縛を受けて孤立していた彼一個人では、とうてい岩倉使節団のような充実した考察は不可能だった。これが郭日記の『実記』に比しての痛ましい特徴だと言えよう。したがって、彼の観察を詳述するかわりに、度々日本に参照系を求める彼の対応ぶりについて一、二例を挙げるにとどめる。大は国家財政や税制から小は万博対応のルールに至るまで、井上馨や上野公使に教えを乞うた例は前述した。他に、彼は終始「日本の英国にいる者約二百人、ロンドン九十人」（2・166）という留学生事情にも強い関心を抱いていた。洋務派中の異端児として、彼は早くから留学生派遣の（海軍や操艦などしか学ばせない）「武備」一点張りの路線に不信感を持っていた。それが在イギリス日本人留学生の専攻の多様さと実学尊重の特徴、すなわち派遣に際しての明確な方向性を知るに及んで、ついに留学生担当の部下に命じて「連れてくる留学生諸君に改めて地質学、冶金学、探鉱、採炭、錬鉄、および鉄道や電学等を学ばせて実用を求める」、という改革の挙に出た。だが、その結果は知れていた。一部実学も含まれているはずの洋務運動の時勢下とはいえ、例の武備、方言二点セットの限定を超えて考え提案でもしようものなら、村八分にされるのが必至の当時の朝廷と官界だった。上司で同志の李鴻章にしたところで、「探鉱採掘、鉄道敷設、新たに洋学を興して人材養成等々」は都中に「それを敢えて任ずる人無し」、故に自らも「已に口を絶して談ぜざる」こと久しい[7]、といって彼の案を封じ込めてしまうほかなかった。さて、ここで彼らのいう鉄道敷設の一点について、その「敢えてする無し」ぶりを見てみよう。それに関しては、現に、イギリスがこの面の利を欧洲に広げて猶足りず「又鉄道ヲ印度ニ架シ、『オオスタラリヤ』に架シ、今ハ又支那ニ架センコトを企ル」（1・150）と岩倉使節団にも見聞されたほどに、早くから持ち上がった話題ではあった。だが、数年前の維新で危うく独立と自主を保てた日本と違って、アヘン戦争以後の中国では、何か新しいことを興すにあたり事々に主権、体制の保持と近代文明の学習、導入という鋭い二元対立に陥る。鉄道の敷設がその典型例で、十九世紀六十年代早々に、主に在中国のイギリス勢力が中国の主権完全無視の形でその動き（企画からもぐり施工まで）を始めていた。そのため、イギリス側と清朝当局との間に無数の紛争や交渉が繰り返されたが、勝つのは強権に決まっていた。一八七六年、イギリス人の無断敷設の「淞滬鉄道」（呉淞・上海間）がとうとう開通し、事業主はかつて対中国アヘン販売を請け負い、したがってアヘン戦争の誘因を作るにも与った二大商社の一つ、ジャーディン・マセソン商会（中国名「怡和洋行」）であった。ところで郭嵩燾は洋務派陣営の一員としてそれまで十数年間、押しつ押されつの一部始終を知らないはずはなく、その上、彼が上海を出帆する二日前に鉄道の全線開通に出会っていた。近代文明信仰の強い彼のことだから、中国初のこの鉄道の開通を、一方

ではある安堵の気持ちで眺めていたのかもしれない。ところが思いがけず、この一件の巻き起こした風波がすかさずにロンドンにまで及び、まだ席の暖まる暇もない彼を巻き込んでしまうことになった。鉄道の無断開通が清の朝野に大きな波紋を呼んだが、その反面、解決策も案外迅速で快刀乱麻そのものだった。交渉を重ねた末、清当局が法外の高値で鉄道を買い取り、ただちに取り壊しに付したのである。その任に当ったのはもう一人の洋務派の名臣沈葆禎であった（買い取った器材設備は辺地台湾に運ばれて台湾初の鉄道となり、現地そして後の植民地統治者には妙な怪我の功名になった由）。そこで洋務派中の開明派と衆目の一致する郭のもとへ、上海のイギリス関係者から陳情の書が来るわ、英外務省より（沈に）「代わって挽回を説得するよう」依頼されるわで、対応に追われる。彼にしても鉄道の利を説く方が正論であることが解るため、「此の挙じつに謂無し」と言って、かつての僚友の名節を惜しみつつ「二たび書を送り論を陳べる」ことをあえてした。しかし、結果として「竟に返り言ひとつない」ありさまで、彼に伴うのはただ、こちらの『タイムズ紙』などの日々「中国の愚を嗤う」世論を黙って見るほかない（2・258・325・333）孤独の境地であった。

それでロンドンにいる郭公使にはもう、彼の言う「学問を問う」の道一つしか残らないことになった。ただ、そうは言っても、彼のために嘆く必要はない。たしかにこれまで見てきたように、止むを得ざる面は大きかったものの、一方、伝統的な中国文人は上質な教養を身につけた者ほど好学と究理的な志向が強く、歴史や文化の洞察につとめるのは本領とも言うべきである。郭はイギリス赴任のずっと前から「西洋の国を立てるに本あり末あって」、なかでも「国中の士と民を通じて一に学に出づる」のが大本だという認識を持っていたし[8]、ロンドンに来てからの見聞はまたその信念をますます不動なものにした。全日記をめくってみると、彼が如何に西洋の新旧の学問に対して、およそ彼の年令、位、教養パターンから見れば信じられないほどの情熱を傾注していたかが手に取るように解る。見方によっては、それは彼にとって晩景の自己を生きるただ一つの道でもあった、と言えるかもしれない。ギリシア、ローマ、エジプトなど古文物古文明に対する関心と、一般の博物館、展覧会参観をのぞいても、彼自らが手づるを求め引き合わせを頼んで個人講義を受けたり、実験を見に行ったり、読書や独学の案内を求めたり（たとえば井上馨に読むべき経済学原書を聞くなど）した、往々にして長文の記録は一巻の日記に満ちている。大雑把に見ても、それらの聴講と実験は、光・熱・電・磁・力・化の諸学や地質、探鉱、それから法学、経済学、人類学、哲学などの広範囲におよんでいる。彼の「英国の実学を講ずるは比耕（ベーコン）より肇きたり」という的確な断定、そこから遡って中国式に退夫子（タレス）、畢夫子（ピタゴラス）、瑣夫子（ソクテラス）、

巴夫子（プラトン）、亜夫子（アリストテレス）、安夫子（アンティステネス）……と且つ挙げ且つ論じて「近世格致（格物致知の学、ほぼ物理学相当）家の言、希臘（ギリシア）みな前よりこれ有る」こと、それらの全学問は「亜歴克山太（アレクサンドロス）より以降、天下に広がり、泰西の学問ことごとくここに源をもつ」（2・946―947）と結ぶくだりは圧巻である。考証によれば、それは近代中国人による最初の、しかも極く簡にして要を得た古代ギリシア哲学紹介の嚆矢を成しているというのである。[9] そして、学を求める過程で彼の発した、自分は「争うところ分秒の間にして、考察するにかつて余力を遺さぬ」、「この国の学問に造詣深い士大夫と交遊するを得、また楽しむべからずや、慚愧に堪えざるは年老いて学を失し、諸事において通暁する所なきが故、ここにて存分益を取る能わず、背きたるも多多あらんことを」（2・172―174）といった類の述懐に接する者は、今日といえども心打たれずにはおれないだろう。

一方、久米の『実記』にも、そういった学問、学理を究めるような記述がなかったわけではない。使命と行程の都合で、郭のように一つの土地にとどまってゆっくり見たり記したりはできなかったかわりに、やはり前述したような使命と、何でも本国の新政に移そうという緊張感や自信がベースにあるため、少しも空理空論に流れず、何一つ例の「営業・営生」に直結しないものはない、という特徴が目に付く。たとえば、他国の道路ひとつ見れば「理学ノ開ケニ従ヒ、斜面ノ理ヲシリ、且道路ノ制ヲ設ケ」（1・240）ることにつながり、錬鉄から製鋼の工程を見れば「東洋ニテハ、此鉄質化合ノ理ヲシラス、只天然ヲ仰キテ、其用ヲ足セルノミ」と悟り、「宋ノ沈括カ夢渓筆談」にまで遡っての反省（1・305―306）が生まれる。また「板玻璃ノ製造」過程に触発されて、「我邦ノ化学ハ元医科ヨリ原（もと）ヲ開キタレハ」それの「化学ノ一隅」たると「需用少キ精品ヲ製スル目的」に対する誤認のゆえに、かえって「一般ノ工業ヲ進歩スルニ、大ナル障碍トナリタリ」（1・338）と新たな認識を開くに至る。加えるに、そういった過程を通じて「只済生ノ道ニ用意薄ク、高尚ノ空理ニ日ヲ送ル」（1・254）往日の東洋を、その「五行ノ説、性理ノ談」から『夢渓筆談』ほか大量な漢典籍までを対立軸あるいは旧い限界として引きつつ論ずるのも、一つの特徴と言ってよかろう。久米一代の旧学の該博さを目にして感心しながら、皮肉にも、そういう記述スタイルこそ、それ以降の近代日本が何時までもモタモタしている東と別れ、西へ趨く、ひいてはそれを「悪友」とか「反面教師」とするパターンの前兆にあたるのではないか、というような気もする。

先覚者の末路

郭嵩燾は、とうとう自滅の道を辿ることになった。いな、彼がその任に就く時点からすでに、そう決まっていた。国を発つ前に、彼は主管官庁から「対外交渉の事件、各国の風土、人情、政治、経済等各方面の状況を詳細に記載し、随時に報告するよう」命じられた。それを受けて彼は航海の途中、ひたすら精進につとめて一冊の『使西紀程』を認め、北京に送った。だが、あろうことか、この道中記の小冊子が、言ってみれば彼方の土を踏む前から彼の足をすくってしまい、着任と同時に（職務の）余命いくばくもないと宣告されるような、信じられない不条理な結果を招いたのである。沿路に見聞した開けた世界と近代文明の様子を如実に記したに過ぎないこの一冊が、官板に付されるや、たちまち北京の官僚や士大夫の社会において上を下の大騒ぎが巻き起こった。権威的儒者はそれを「道程の所見を記して誇張と粉飾の極みを尽くし、大抵西洋の法律厳明、仁義備わり至れり、富強たけなわして、天下それに心を帰するを謂う……およそ血気ある者で切歯せざるは無し」と言って世論を煽り、弾劾を司る大臣が郭の即時召還を上奏して、罷免運動へとエスカレートさせる。[10] 風潮に押されて朝廷は都合上罷免は留保したものの、紀程の「毀板」（版木をこわす）という罰を下した。文章で経国と立言を命とする誇り高き文人にとって、譬えていえば、あの宮刑で「生き恥さらした男」司馬遷につぐような恥辱だった。そこへ、ロンドンの公使館内にも造反が起こった。当初上層部が郭を監視、牽制させるためにつけた保守派ひもつきの副使某がただちに北京に呼応して彼に喧嘩を売る、密告をする、面罵まで浴びせるの攻勢をかけて、任期中それが絶えることはなかった。目を覆いたくなるような記述ばかりなので、ここで一つのサンプルを見るだけにする。都の罷免風潮に追討ちをかけるような郭の最新「三大罪状」という密奏状がある。

一、某砲台参観のさい洋人の衣を肩に羽織る、縦令凍死するも亦身にするは当らず。

一、ブラジル国王にまみえるにさいし擅に自ら起立す。堂々たる天朝大臣、何ぞ小国の君のために敬を致すことあらんや。

一、バッキンガム宮殿にて音楽を聴くに、屢々音楽単を取って閲して洋人の所作に倣う。[11]

たとえば一番目の罪、それはある日、砲台参観に往く船のデッキに立った郭が寒そうにしているところを案内のイギリス人に見られて気

遣われ、マントを貸されたことを指す。まったく笑止な、といいたくなるところだが、西洋人に法政厳明とか仁義とか富強など文明があってたまるかという今の罷免運動の論理と「厳夷夏之大防」の古訓に通じたものだから、どうすることもできない。それよりも何よりも、郭嵩燾においては彼の国を思う心、職務を全うする使命感、とりわけ何につけても憚ることなく建言をする情熱こそが、決定的に彼の職務遂行を不可能にしてしまったのである。留学生や鉄道に関する建言の例は前述したが、それらにもすでに予兆があったように、最後にはとうとう、例の李鴻章から、主管官庁から朝廷内外まで都中「均しく尊下より建言条陳の過多なるを嫌」っているのだから、「向後この類の文字は作らぬが宜し」[12]と、いわば本から言から人そのものまでの全面「毀板」を宣告され、最終の引導を渡されてしまった。

さて、冒頭に引いた郭発言の一節に戻ってみれば、小論に接する最初から、読者はこの文と隣りの『実記』のそれとのニュアンスの明暗や、思いやられる行先の差に気付かれたことだろうが、それもそのはず、これは彼が失脚後の発言だからである。帰郷後の彼は、かつて曾国藩はじめ「中興の名臣」を輩出させた郷里の恥とも敵とも目され、そんな中で惨憺たる余生を送ることになった。にもかかわらず、今後はただ蟄居に甘んじてこれ以上「洋務を談ずる勿れ」という友人の忠告に対して、郭は冒頭の言をもって答えとしたのである。ここに、いささかでも弱音や精神的衰え、あるいは月並な「英雄末路」の嘆きが読み取れるだろうか。いや、そこにはむしろ、一個の屈原・司馬遷以来の天下国家と先知先覚を自任し、歴史を生きるにも再生するにも強い上質中華文人の魂、奥ゆかしさを見て取ることができるのではないだろうか。

註

(1)『特命全権大使　米欧回覧実記(一)』(岩波文庫)。この書は本論の依拠する主要文献なので以下文中のこの編よりの引用は(1・ページ数)で註記の形を取る。

(2)『郭嵩燾　倫敦与巴黎日記』(中国・兵麓書社『走向世界叢書』一九八四年)、おなじく本論の主要文献なので以下文中の同書よりの引用は(2・ページ数)で註記する。なお日本語文(以下(7)―(12)も含む)は拙訳による。

(3)由水常雄『ジャポニスムからアール・ヌーヴォーへ』(中公文庫)20ページ。

(4)(1)の第(五)編 25ページ。

(5)(6)同43ページ。

(7) 郭嵩燾『養知書屋文集』巻十三「致李伯相」と李鴻章『朋僚函稿』巻十七「復郭筠仙星使」。引用は註(2)の「叙論　論郭嵩燾」(鍾叔河)に拠り、なお(9)以下も同じ。

(8) 曽永玲『中国清代第一位駐外公使　郭嵩燾大伝』(中国・遼寧人民出版社、一九八九年)200ページ。

(9)(2)の「叙論」。

(10)(2)の「叙論」。

(11)(2)の「叙論」。

(12)(2)の「叙論」。